

若者の電子書籍利用に関する研究

古谷 悠

日本大学 法学部

キーワード：電子書籍，聴く読書，読書傾向

1 はじめに

近年、本を読む手段が多様化しつつある。紙の本を読む以外に、デジタル端末で読書を行う電子書籍などがその最たる例と言える。書籍出版に関する法律で、著作権というものがあるが、2014年に著作権法が改正され、電子書籍にも著作権が付与されるようになると、電子書籍の市場は急速に拡大した。公益社団法人・全国出版協会・出版科学研究所が2014年に開始した統計調査によると、2014年時点で1144億円だった市場は、2022年までの8年間でおよそ4.4倍の5013億円の市場に成長している。^[1]

代表的なサービスとして、「kindle」や「d-book」、
「楽天 kobo」などの、定額制の配信サービスが挙げられる。毎月決まった額を課金することで様々な書籍が読み放題となる。これらのサービスの普及によって、読書の幅が広がり、より多くの書籍を手軽に読むことができるようになった。

以上を踏まえ、本稿では若者を中心とした読書的手段に焦点を当て、電子書籍の問題点と今後の展望を論じていく。

2 電子書籍の歴史

国内発の電子書籍は、1985年に三修社から発売された「最新科学技術用語辞典」である。当時はオンラインの環境が整っていなかったため、大量のデータを頒布するためにCD-ROMが使用された。それを各個人が読めるようにするために、読み出し専用の機械を1990年にSONYが開発、販売した。

これがきっかけとなり、様々な企業が模倣をして開発が進んだが、読みにくいといった理由で大きなブームになることはなかった。1990年代に

PCがブラウザを標準装備したことがきっかけで、オンライン上で文章を閲覧する仕組みが定着した。これを機にオンラインで書籍を購入、閲覧する仕組みが整えられていった。さらにこの流れは携帯電話にも受け継がれ、大量通信の実現や携帯電話専用ビューアーが導入された経緯から、2009年には、日本の電子書籍市場の89%を占めるに至った。

2007年にAmazonから発表されたkindleは大きな反響を呼んだ。元々書籍を販売するサイトだったこともあり、長年培われた豊富なコンテンツ力を全面に押し出したことで、アメリカで大きなブームを引き起こし、瞬く間に日本の市場規模を追い抜いた。さらに2010年には日本でもiPadが発売されたことで、様々な電子書籍リーダーの開発や電子書籍のサービスが開始され、市場は更に拡大していった。このころから、デジタル端末を用いた読書が一般化され始め、今日に至るまでの電子書籍の形が形成されていった。^[2]

3 「オーディオブック(聴く読書)」に関して

3.1 聴く読書の可能性

「電子書籍」について述べるにあたり、「聴く読書」という読書スタイルを取り上げたい。読書は一般的に、静かに座って集中して行われる活動とされてきた。しかし、現代社会においては多忙なスケジュールや情報過多の中で、十分な時間を確保して、集中して読書に取り組むことが困難な人が増加してきている。このような背景もあり、新たな読書スタイルである「聴く読書」が注目を浴びている。

「聴く読書」とは、オーディオブックサービスを通じて本の朗読を聴くことができるサービスである。「聴く読書」は、内容を朗読する音声で本を

楽しむことができ、月額制サービスによって膨大な数の朗読作品を手軽に楽しむことができる。「聴く読書」は、集中して読書する時間を確保できない人々にも適したサービスであり、端末と聴く環境さえ整えば、他の作業と並行して利用することも可能である。これにより、時間に追われる日々の中でも読書を楽しむことができ、読書習慣を持たなかった人々にも読書の機会を提供する可能性がある。

この「聴く読書」に関しては、読書の効率化のためだけに注目を浴びているわけではない。目が不自由な人や、ページをめくることが困難な人、字が読めない人、読書姿勢が維持できない人など、様々な理由で紙の本での読書を諦めざるを得なかった人のためのコンテンツといっても過言ではない。

3.2 聴く読書のメリット・デメリット

「聴く読書」を活用する際のメリットは、「時間効率の向上」「目の負担が減る」「プロによる朗読なので聴きやすい」などが挙げられる。「時間効率の向上」に関しては、通常の見書と違い、聴きながら別のことをする事が可能になるからである。通勤通学時はもちろん、家事をしながらでも読書が可能となる。「目の負担の軽減」だが、文字を追う必要がないため、本を選ぶとき以外は視覚を特に必要としないからである。目が疲れることがないのであれば、より読書に没頭できる人もいるかもしれない。「プロによる朗読」に関しては、朗読を任されるのはプロの声優やナレーター、役者などが主なため、ストレスなく内容に集中できる。

デメリットについては、「読み返しや読み飛ばしが出来ない」「ラインナップが少ない」「線引きや書き込みが出来ない」などが挙げられる。「聴く読書」は実体がないため、書き込みなどはもちろんできない。読み飛ばすためには早送りなどの操作が必要であり、何ページも先の文章を読みたい場合などには向かない。また、読みたい本が必ずしもオーディオブック化されているとは限らないため、聴きたい作品に出会えない可能性がある。^[3]

3.3 「聴く読書」の認知度について

SNS やテレビの広告などで認知度自体は向上しているが、実際に活用している人はどの程度存在

するのだろうか。2022年にインプレックス総合研究所が実施した「電子書籍の利用率アンケート」の中でのオーディオブックの利用率に関するアンケートは、全11794回答中、「よく利用する」が1.9%、「たまに利用する」が6.1%、「利用してはいないが、今後利用してみたいと思う」が19.3%という結果となった。^[4]全体の8%しか使ったことがないということは、未だマイナーなコンテンツであるといえる。

4 アンケート調査

今回、学生を中心に、電子書籍の利用率を明確にするため、アンケート調査を実施した。

アンケート調査は、10代～20代の86名を被験者とし、実施時期は6月中旬から7月下旬である。

4.1 調査結果

まず普段どのような本を読むか問うたところ、「文芸(小説やエッセイなど)」が33件、「漫画」が61件、「趣味・実用書(レシピ本やハウトゥー本)」が19件、「学習参考書(赤本、資格試験対策書)」が27件、「専門書(医学、法務に関する書籍)」が10件、「雑誌」が18件という結果となった。若い世代を対象にしたアンケートということもあり「漫画」の回答が最も多い結果となった。次に回答数が多かった「文芸」は「漫画」の半分ほどの回答数に留まった。(図1)

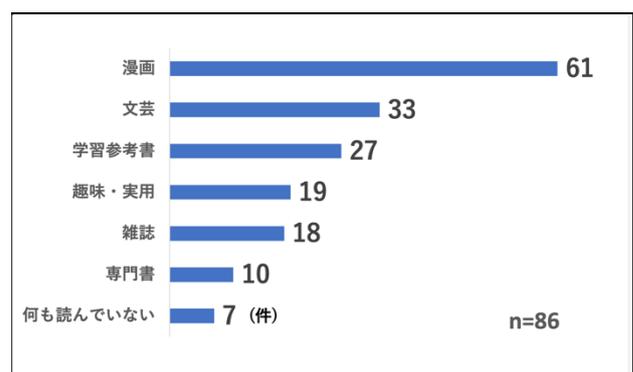


図1. 普段どのようなものを読むか

電子書籍と紙の本、どちらを選ぶか問うたところ、50%の人が両方使う、2.3%の人が電子書籍のみを使うと答えた。残りの41.9%が紙の本のみ、5.8%が本は読まないと答えた。(図2)

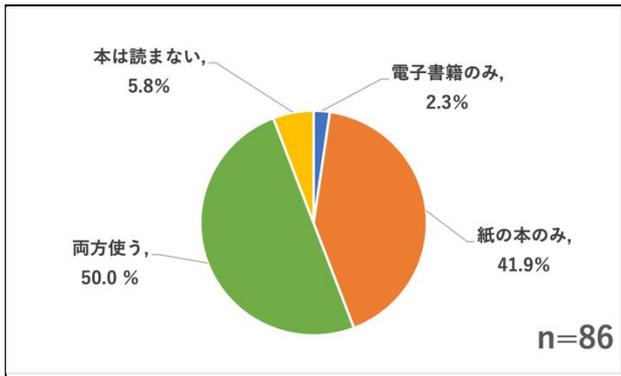


図 2.電子書籍と紙の本どちらを選ぶか

4.2 電子書籍を選ぶ理由

なぜ電子書籍を利用するのかを問うたところ、「持ち運びが楽だから」が 25 件、「置き場所に困らないから」が 20 件、「書店に行かなくていいから」が 13 件、「読みやすいから」が 10 件、「アプリなどで無料で読むことができるから」が 2 件となった。(図 3)

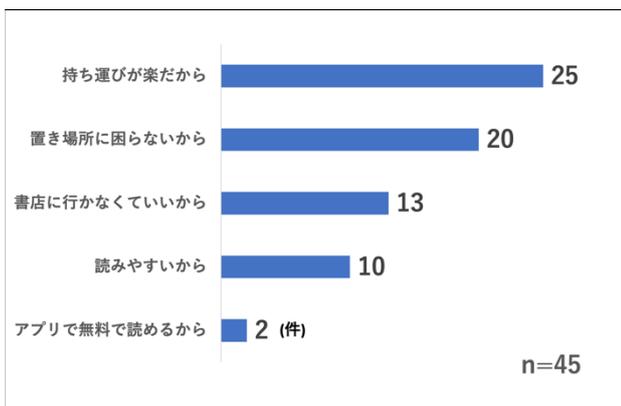


図 3.なぜ電子書籍を選ぶのか

保管の際場所を取らず、持ち運びが楽といった、電子書籍のコンパクトさを評価している声が多数上がった。また、書店に行かなくてもよいといった声も多く寄せられており、欲しい本をその場でダウンロードして読むことができる電子書籍の強みがよく現れていた。また、その他の理由として、「アプリなどを用いて無料で読むことができるから」といった回答も少数ながら見受けられた。

4.3 紙の本を選ぶ理由

紙の本のみを選ぶと回答した人たちに対して、なぜ電子書籍を使わないのか問うたところ、「集中

できるから」が 7 件、「読了の達成感が感じられるから」が 8 件、「手元に置いておきたいから」が 12 件、「目が疲れるから」が 16 件、「読みにくいから」の回答が 17 件となった。(図 4)

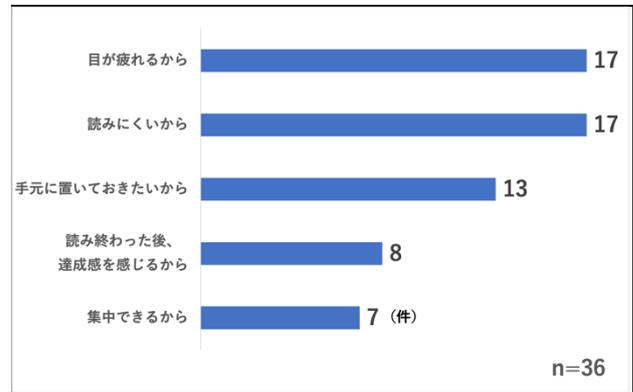


図 4.電子書籍でなく、紙の本を選ぶ理由

紙の本を選ぶ大きな理由の一つとして、電子書籍は「読みにくい」や「目が疲れる」といった回答が目立ったことから、電子書籍を読む「媒体」に問題があることが挙げられる。

また、紙の本に物としての価値を見出している旨の解答も多くみられた。装丁のデザインが気に入っている場合や、インテリアの一つとして本を置いておきたい場合などが理由として考えられる。

5 考察

今回のアンケート調査から、電子書籍に対して、読書をする人がどのような点にメリット・デメリットを感じているのか、様々な意見を得ることができた。そして今回のアンケート調査から明らかになった電子書籍の課題点は、「読む際の疲労感」、「読みにくさ」の 2 点である。

1 つ目の「読む際の疲労感」については、アンケート調査において、対象となった 36 人中 17 人が電子書籍を選ばない理由として回答していた。デバイスの液晶画面を長時間凝視することで起こるものであるが、解決策としては、適宜休憩を挟むことや、ブルーライトカットのメガネをかけて読むことなどが挙げられる。また、長時間の読書に適した「電子書籍リーダー」を使うといった方法も挙げられる。しかし、新たに「物」を用意す

る必要があり、可能な限りコストを抑えたい人には向かないと考察する。

2 つ目の「読みにくさ」であるが、これは電子書籍を読む際に使っているデバイスの画面の大きさに問題があると推測する。タブレットなどのある程度画面が大きな端末は除き、スマートフォンなどの小さな画面で書籍を読む際は、画面のズームが必要な場合があり、画面の操作に気をとられて、読書に集中できないことなどが懸念される。解決策としては、文字の並びが電子書籍用に改良されている書籍を購入することなどが挙げられる。「Kindle」などは、ダウンロードした書籍の文字の大きさを変更できる機能が付いており、自分が読みやすい文字の大きさにカスタマイズすることが可能である。しかし、その分ページ数が多くなり、原書の文字の並びではなくなってしまう。人によっては文字の並びが変わるだけで印象が変わることがあるため、これを好まない人もいるだろう。さらに、電子書籍用の文字の並びに対応していない書籍も存在するため、一概に電子書籍リーダーにすればいいというわけではない。

6 終わりに

本調査により、読書の手段が個々人によって実に様々であり、「電子書籍」に関しては、アンケート回答者の半数以上が何らかの形で積極的に利用していることがわかった。読書傾向のアンケートにおいて、「漫画」の回答数が最も多かったことから、電子書籍を用いた読書においても、漫画が多く読まれていると考えられる。漫画も電子書籍であれば画面の拡大ができる上、通勤通学時に手軽に読める為、若者が利用するのに適していると言える。一方で、「電子書籍」に対し抵抗を感じている意見も多く見られ、改善の余地も見られた。中でも「目が疲れる」「読みにくい」といった意見は真摯に受け止める必要がある。特に、小説などの文芸作品は文字サイズを変更すると文字の並びが変わってしまうため、人によっては違和感や読みづらさを感じる場合もあるだろう。文字の並びが変化しても違和感のない画面の表示方法を模索するなどしてこれらの課題点を改善し、漫画アプリと同じように、気軽に文芸作品を読めるアプリが

開発されれば、小説やエッセイをスマートフォンで読む文化が定着し、若者の読書の幅をより一層広げることができると考察する。「電子書籍」の普及が、若い世代だけでなく、全ての世代の人たちに有益な結果をもたらすことを期待したい。

参考文献

- [1] 公益社団法人、全国出版協会・出版科学研究所，“出版月報”
<https://onl.tw/ev8yVzN>(2023年7月25日確認)
- [2] 株式会社ルーラー，“デジタカジャーナル”
<https://www.ebook5.net/journal/column/history.html>(2023年7月30日確認)
- [3] 株式会社スマートゲート，オーディオブックに関するアンケート
<https://smartgate.jp/bpo/information/10/>
(2023年7月30日確認)
- [4] 株式会社インプレックス，電子書籍の利用率調査
<https://onl.tw/QBE6jyx> (2023年7月30日確認)